

フォークナー，村上春樹，ハーディングー—we-narrativeの物語論を求めて——
(2023年度文学部英文学科公開講義「いま，古典を読むこと」Proceedings)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000139

フォークナー，村上春樹，ハーディング

—— we-narrative の物語論を求めて ——

遠藤 健一

0. はじめに

近年の物語論研究の関心事の一つに「we-narrative（〈私たち〉の物語）」と呼ばれる「1人称複数形小説」がある。本講義では、主要な先行研究を紹介した後、「〈私たち〉の物語の記述モデル」を紹介した。これは、「〈私たち〉の物語」と呼ばれる物語テキストを解釈・分析する際の参照枠として筆者が提案したものである。この記述モデルを使って、〈私たち〉の物語の古典中の古典、ウィリアム・フォークナー「エミリーに薔薇を」（1930）、〈私たち〉の物語の実験的な試みである村上春樹『アフターダーク』（2004）、ポール・ハーディング『ティンカーズ』（2009）を分析・紹介した。

なお、本号所収の拙論「1人称複数形小説の物語論の試み — “A Rose for Emily”（1930）、『アフターダーク』（2004）、*Tinkers*（2009）から *Oroonoko*（1688）へ」には本講義もほぼ取り込まれているので参照されたい。

1. 〈私たち〉の物語の記述モデル

前提として確定的な動作主としての〈私〉、「中心の〈私〉（pivotal-I）」を指定する。物語言説のレベルの存在である〈私たち〉、物語内容レベルの存在である〈私たち〉にそれぞれ「中心の〈私〉」を指定する。〈私たち〉を構成するそれぞれの〈私〉が中心の〈私〉になる可能性もある。さ

らに、〈私〉の集合体が〈私たち〉を構成するという「常識」に加えて、ジャン＝リュック・ナンシーのいう「共にあること」の存在論、「単数はその存在自体において複数である」(Nancy 1996) という共存在論的な〈私たち〉と〈私〉の関係つまり〈私〉はその存在自体において(既に、そして常に)〈私たち〉であるといった考え方を援用する場合もある。

1. 物語言説レベルの〈私たち〉: 語り手の〈私たち〉(=中心の〈私〉+ α); 個人の声/集団の声? 集団性? 中心の〈私〉の非/個性?

記述指標 1 は、物語言説レベルの〈私たち〉(=中心の〈私〉+ α)つまり語り手の〈私たち〉の声について、中心の語り手の〈私〉の声が識別できる個人の声として聞こえるか、中心の〈私〉の声は識別できず集団の声として聞こえるかを記述する。例えば、中心の〈私〉の声が非個人的でそれとは識別できなければ集団の声として、個人的であれば個人の声として記述する。

2. 物語内容レベルの〈私たち〉: 登場人物の〈私たち〉(=中心の〈私〉+ α); 内的焦点化子の〈私たち〉; 個人の眼差し/集団の眼差し? 集団性? 中心の〈私〉の非/個性?

記述指標 2 は、物語内容レベルの〈私たち〉(=中心の〈私〉+ α)つまり登場人物の〈私たち〉の眼差しについて、中心の〈私〉が内的焦点化子として機能しているか、中心の〈私〉の眼差しは識別できず集団の眼差しとして機能しているかを記述する。例えば、中心の〈私〉の眼差しが非個人的でそれとは識別できなければ集団の眼差しとして、個人的であれば個人の眼差しとして記述する。

3. 〈私たち〉の非/確定性と非/変動性?; 語りの進行に伴う変化。

記述指標 3 は、語り手=登場人物の〈私たち〉を確定できるか否かを記述する。また、語りの進行に沿って変動するか否か、変動する場合

にはその変化を記述する。

4. 友／敵関係という語りのポリティクスの顕在化: 語り手=登場人物の〈私たち〉と3人称(s/he; they)で指示される登場人物たちとの差異化に伴う友／敵関係という語りのポリティクスの発動, 有標: 友／敵; 無標; 無効化として記述する。

記述指標4は, 友／敵関係という語りのポリティクスの顕在化を記述する。語り手=登場人物の〈私たち〉と3人称(彼／女ら)で指示される登場人物間の差異に伴って友／敵関係が発動するか否か, あるいは, 語りの進行に沿っての登場人物の〈私たち〉と3人称(彼／女ら)で指示される登場人物間に出来てくる差異化に伴って友／敵関係が発動するか否かを記述する。友／敵関係という発想はカール・シュミットの「政治的なもの」の概念から得ている。ここでは, 「政治的対立は最も強烈で極端な対立であり, あらゆる具体的な対立状態は, 味方と敵のグループ分けという極端な地点に近づけば近づくほど, それだけ政治的になる」(Schmitt 2022 (1932; 1933): 26) から, 友／敵関係の兆候を含めて対立状態の程度を記述する。もとより, 登場人物の〈私たち〉と登場人物の(彼／女ら)の差異が直ちに友／敵関係の発動とは限らず, その場合は無標として記述する。シュミットの友／敵関係という二項対立を無効化あるいは脱構築するような絶対的な友愛の場合も想定する。

5. 包括／除外の〈私たち〉(inclusive/exclusive we): 聞き手 you の語り手 we への内含? 聞き手ばかりかレベルを超えて現実の読者までも内含するか?

記述指標5の包括／除外の〈私たち〉(inclusive/exclusive we)について記述する。この文法用語の援用はフルダーニク(Fludernik 2011)に

負う。語り手の〈私たち〉の1人称複数形に聞き手の〈あなた〉が内包されている否かを記述する。内包されていれば包括の〈私たち〉, 内包されていなければ除外の〈私たち〉として記述する。包括の〈私たち〉の場合, 聞き手ばかりかレベルを超えて現実の読者まで内包されている可能性があるかどうかについても留意する。いずれ, この指標の持つ意義はレベルの違反という事態である。

2. 〈私たち〉の物語の主な小説

〈私たち〉の物語の主な小説として, 以下の15編を簡単に紹介した。フルダーニク (Fluderniki 2011) がリチャードソン (Richardson 2006) のリストを参考に拡充・精査した英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語を使用言語とする「〈私たち〉の物語リスト」の82編に含まれていないのが, 1; 9; 11; 14; 15の5作品。また, *は, 語り手の〈私〉によって登場人物が〈私たち〉という複数形で指示されている作品。1については, 拙稿「1人称複数形小説の物語論の試み」で〈私たち〉の物語の先駆として読めることを論じている。共存論的な〈私たち〉と〈私〉の関係を体現しているのが8, 〈私たち〉が恋人なり夫婦なり双子なりの2人限定の設定が5; 7; 8; 9, 記述指標4の友／敵関係の語りのポリティクスの顕在化が例証できる政治的テーマをモチーフにしているのが4; 6; 12, 友／敵関係そのものの無効化あるいは脱構築として読めるのが14; 15。

1. Aphra Behen *Oroonoko or the Royal Slave* 1688. *
2. Joseph Conrad *The Nigger of "Narcissus"* 1897 *
3. William Faulkner "A Rose for Emily" 1930; "That Evening Sun" 1930.*

4. Günter Grass *Katz und Maus* 1961.*
5. Toni Morrison *The Bluest Eye* 1970.*
6. Donald Barthelme “Some of Us Had Been Threatening Our Friend Colby” 1976.
7. John Barth *Sabaatical: A Romance* 1984.
8. Agota Kristof *Le grand cahier* 1986.
9. Rebecca Brown “Folie à Deux” 1993.
10. Jeffrey Eugenides *The Virgin Suicide* 1993.
11. 村上春樹『アフターダーク』2004. (英訳2008)
12. Yiyun Li “Persimmons”; “Immortality” 2005.
13. Joshua Ferris *Then We Came to the End.* 2007.
14. Paul Harding “Borealis” in *Tinkers* 2009.
15. 大江健三郎『晩年様式集 (イン・レイト・スタイル)』2013.*

3. 「エミリーに薔薇を」

記述指標に準拠した「エミリーに薔薇を」の解釈と分析は以下の通り。

1. 物語言説レベル: ジェファーソンの共同体の記憶を体現する集団の声。中心の〈私〉は、3世代中、中間世代に属する男性。女性でない根拠は、上の世代に属するサートリス大佐による課税の免除措置の際に、「まことしやかに作り上げられた理由に女なら納得もするだろうが」という語り手の〈私たち〉によるメタ物語的な解説にうかがえるジェンダー・バイアス。
2. 物語内容レベル: ジェファーソンの共同体の記憶を体現する集団の眼差し、最後の場面では、その現場に立ち会った〈私たち〉に限定。

中心の〈私〉は3世代中の中間世代に属する男性の眼差し。

3. 〈私たち〉の非／確定性と非／変動性; 語りの進行に伴う変化: ジェファーソンの世代を超えた集団, 但し, 最後の場面では, その現場に立ち会った〈私(たち)〉に限定。
4. 〈私たち〉の友敵関係の語りのポリティクス: 開かずのブライダル・ルームの装いの寝室を暴力的に開けることを企てた集団を「彼ら」と呼称することによって, 潜在的な友敵関係が顕在化。「彼ら」をより若い世代の男性集団と解釈する。
5. 包括／除外の〈私たち〉: 聞き手=共同体の記憶の伝承という側面を考慮すれば共同体の将来世代も含むが, 現実の読者までは及ばない。

語り手=登場人物の〈私たち〉の声と眼差しは, 世代を超えたジェファーソンの共同体のものと見做す解釈で一致するものの, 中心の〈私〉については多様な解釈が提案されてきた。というのも, 中心の〈私〉が開かずの2階寝室への侵入者たちの一人であることに解釈の余地がない以上, その特定化は是非もないからである。しかし, 中心の〈私〉に関する明示的な情報については皆無である。主要な解釈は以下の通り。「エミリーの死亡の時点で, 共同体を代表する50・60代の男性」(Brooks 1977: 158-59), 「共同体の女性の代表」(Burdock 1990: 210), 「3世代を包含する共同体, 但し, 課税通知送達の町役場の職員に特定可能」(Margolin 2001: 245), 「共同体の上流階級の白人男性たち, 町全体から特定の個人のグループに限定」(Richardson 2006: 47), 「共同体それ自体(中心の〈私〉の不在あるいは〈私たち〉という集団)」(Bekhta 2017: 171)。前の2例は物語論的な枠組みでの分析ではない。後の3例は物語論的な枠組みでの〈私たち〉の物語に関する議論で例示的に分析されたものである。記述指標の適用によって,

それぞれの解釈あるいは分析の過不足も明示化できる。もっとも本稿の解釈に近い解釈がアメリカ・ニュークリティシズムを代表するクレアンズ・ブルックスのものであったことは興味深い。

4. 『アフターダーク』

記述指標に準拠した『アフターダーク』の解釈と分析は以下の通り。

1. 物語言説レベル: 語り手の〈私たち〉の声の集団性については不確定，〈私〉の単声の可能性も否定できない。
2. 物語内容レベル: 物語世界内で観察者に徹する登場人物の〈私たち〉（マリの物語では，登場人物たちの発話はすべて直接話法で再現表象，エリの物語では，一度だけ，対象の不透過を特徴とする内的焦点化から一時的な対象の透過へとシフトし，エリの内心の声を自由直接思考で再現表象；物語世界内における眼差しの集団性については不確定，〈私〉の個人の眼差しの可能性，むしろ，指標5との関わりで，語り手，聞き手，場合によっては，作者，読者までをも含む〈私たち〉の可能性も否定できない。
3. 〈私たち〉の非／確定性と非／変動性；語りの進行に伴う変化: 不確定；無変化。
4. 友／敵関係の語りのポリティクス: 無標，代表的な〈私たち〉の物語にはほとんどに発動することを考慮すれば特徴的か。
5. 包括／除外の〈私たち〉: 包括の〈私たち〉（語り手の〈私たち〉）と聞き手〈あなた〉あるいは作者と読者をも内含している可能性も。意図的な物語の審級違反こそが当該小説の独自性。

最も顕著な特徴は指標5に表われる。語り手の〈私たち〉には既に聞き手の〈あなた〉も内含されており，いわゆる包括の〈私たち〉と見做すことができる。それに加えて，私たち読者一人ひとりも語り手の〈私たち〉には包括される可能性を持つのではないか。なぜなら，カメラアイとしての語り手＝登場人物の〈私たち〉による語りと眼差しによって経験する私たち読者の読みの経験は，語り手＝登場人物の〈私たち〉の経験と同期するほかないからである。ここには，物語言説レヴェルの語り手と聞き手の関係から，レヴェルの境界を超えて，現実の読者への訴求と語り手の〈私たち〉に私たち現実の読者一人ひとりも包括される可能性が生まれる。カメラアイとしての〈私たち〉について村上は「一人称複数，つまり一種の共同の視線です。僕と読者がそこで，大げさにいえば「物語的共謀」みたいなことを行うことになります」(村上2005: 174)と述べたことがあるが，現実の作者もまた架空の語り手＝登場人物の〈私たち〉に参与し，架空の聞き手，現実の読者との一体化を覚えるという感覚は興味深い。なお，「カメラアイ」の語りを主張したクリスタファー・イシャウツの『さらばベルリン』(1930)以上に，客観的な観察・描写に成功している旨も指摘した。

5. 『ティンカーズ』

記述指標に準拠した『ティンカーズ』の解釈と分析は以下の通り。

1. 物語言説レヴェル: 中心の〈私〉であるハウードの声から朗読者チャーリーの声に喚起されるクロスビー家5代の家族の集団の声，さらに，ニューイングランドに存在するすべてのモノの可能性。
2. 物語内容レヴェル: 中心の〈私〉であるハウードの眼差しから朗読者チャーリーの声に喚起されるクロスビー家5代の家族の集団の眼差

し、さらに、ニューイングランドに存在するすべてのモノの可能性。

3. 〈私たち〉の非／確定性と非／変動性；語りの進行に伴う変化：確定世；無変化。
4. 友／敵関係の語りのポリティクス：友／敵関係の無効化あるいは絶対的な友愛関係（家族から世界へ）（当該小説のテーマか）
5. 包括／除外の〈私たち〉：包括の〈私たち〉

指標1・2の語り手＝登場人物の〈私たち〉について言えば、「北の」の〈私たち〉の散文詩に限れば、中心の〈私〉は詩人ハワードということになるだろう。『ティンカーズ』というより広い文脈で考慮すれば、祖父ジョージの詩だと理解（誤解）し朗読するチャーリー、父ハワードの詩だと理解して記憶を呼び起こすジョージという言語場を考慮すれば、クロスビー家5代の家族の集団の声と眼差し、ニューイングランドに存在するすべての声と眼差しとして、私たち読者は想像することになるのではないか。指標3の語りの進行に沿っての語り手＝登場人物の〈私たち〉という集団については、時間の経過を超えたハワードの想像の世界である「北の」の物語世界では、〈私たち〉という集団は、最初から最後まで、ハワードを中心にしたニューイングランドのすべての存在、惑星規模のすべての存在として在り続けていたと言える。指標4の友／敵関係という語りのポリティクスの顕在化は、無標というよりは、友／敵関係という二項対立そのものを無効化する絶対的な友愛として記述されるべきである。すべての対立を超えて、すべての存在の友愛的関係の可能性への希望こそが、『ティンカーズ』という〈私たち〉の物語のテーマである。指標5の包括の〈私たち〉か、除外の〈私たち〉かについて言えば、包括の〈私たち〉、場合によっては、私たち読者まで含まれるかもしれない。

それにしても、80歳のジョージが、孫チャーリーの父ハワードの詩の朗読（祖父ジョージのものと誤解しながらの朗読）の「声」を通して、69年前に家族を捨て42年前に一度だけ訪れ、立ち帰りをした父ハワードの「声」を想起しながら、あるいは多分、聞きながら息を引き取るという、最後の語りの仕掛けは秀抜である。

主要参考文献

物語テキスト

- Faulkner, William. "A Rose for Emily." *Collected Stories of William Faulkner*, 119-30. New York: Vintage International, 1995.
- _____. "That Evening Sun." *Collected Stories of William Faulkner*, 289-309. New York: Vintage International, 1995.
- Harding, Paul. *Tinkers*. New York: Bellevue Literary Press, 2009. <https://epdf.tips/tinkers0c8194ee25ef92cb19d3a719dd65908231473.html>
- 村上春樹. 『アフターダーク』 講談社 2004; 講談社文庫 2006.

批評テキスト

- Bekhta, Natalya. "We-Narratives: The Distinctiveness of Collective Narration." *Narrative* (2017) 25 (2): 165-81.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: Toward Yoknapawtpha and Beyond*. New Heaven: Yale UP, 1978.
- Burduck, Michael L. "Another View of Faulkner's Narrator in "A Rose for Emily"." *Studies in English, New Series*. 8 (1990): 209-11.
- Fludernik, Monika. "The Category of 'Person' in Fiction: You and We-Narrative Multiplicity and Indeterminacy of Reference." *Current Trends in Narratology*. Eds. Greta Olson and Monika Fludernik. Berlin, New York: de Gruyter, 2011. 101-43.
- _____. "The Many in Action and Thought: Towards a Poetics of the Collective in Narrative." *Narrative* 25. 2 (2017): 139-63.
- _____. "Let Us Tell You Our Story: We-Narration and Its Pronominal Peculiarities." *Pronouns in Literature: Positions and Perspectives in Language*. Eds., Alison Gibbons and Andrea Macrae. London: Palgrave Macmillan. 2018. 171-92.
- _____. "The Politics of We-Narration: The One vs. the Many." *Style* 54.1 (2020): 98-110.
- Derrida, Jacques. *Politiques de l'amitié*. Paris: éditions Galilée, 1994. [鶴飼哲・大西雅一郎・松葉祥一訳『友愛のポリティックス1・2』みすず書房, 2003.]

- Harding, Paul. "Interview: Paul Harding the Author of *Tinkers*." *Shelfmedia* August 15, 2015. <https://shelfmediagroup.com/interview/interview-paul-harding-author-of-tinkers/>
- Harding, Paul and Jianan Qian. "Apply Aesthetic Pressure to the Language: An Interview with Paul Harding." *Shanghai Review of Books*. June 3, 2018. <https://themillions.com/2018/06/apply-aesthetic-pressure-to-the-language-an-interview-with-paul-harding.html>
- Margolin, Uri. "Telling our story: on 'we' literary narratives." *Language and Literature: International Journal of Stylistics* 5.2 (1996): 115: 33.
- . "Telling in the plural: From Grammar to Ideology." *Poetics Today* 21.3 (2000): 591-618.
- . "Collective Perspective, Individual Perspective, and the Speaker in Between: On "We" Literary Pronouns." *New Perspectives on Narrative Perspective*. Eds. Willie van Peer and Seymour Chatman. New York: State University of New York Press, 2001. 241-53.
- Jahn, Manfred. *Narratology: A Guide to the Theory of Narrative*. Cologne: University of Cologne. 2021 (2017). <https://www.uni-koeln.de/~ame02/pppn.htm>
- Richardson, Brian. *Unnatural Voices: Extreme Narration in Modern and Contemporary Fiction*. Columbus: The Ohio University Press, 2006. <https://muse.jhu.edu/book/28066>
- Nancy, Jean-Luc. *Être singulier pluriel*, Paris: éditions Galilée, 1996. [加藤恵介訳『複数にして単数の存在』松籟社, 2005]
- Schmitt, Carl. *Der Begriff des Politischen*. Hamburg: Hanesatissch Verlagsanstalt, 1933 [1932; 1963]. [権左武志訳『政治的なものの概念』岩波文庫, 2022.]
- 遠藤健一. 『物語論序説: 〈私〉の物語と物語の〈私〉』松柏社, 2021.
- 村上春樹. 「ロングインタビュー: 『アフターダーク』をめぐって」『文学界』59.4 (2005): 172-93.
- 村上春樹・小澤英実. 「インタビュー: 魂のソフト・ランディングのために—21世紀の「物語の役割」『ユリイカ』42.15 (2015): 8-21.